

Title	非イスラーム世界におけるhizmet : ムスリム社会の構築とイスラームの伝統的価値観
Author(s)	阿久津, 正幸
Citation	宗教と社会貢献. 2013, 3(1), p. 1-25
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/24491
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

非イスラーム世界における *hizmet*

—ムスリム社会の構築とイスラームの伝統的価値観—

阿久津正幸*

Hizmet in non-Islamic World: Construction of Muslim Society and Traditional Value of Islam

AKUTSU Masayuki

論文要旨

トルコ共和国に発する「世界平和に貢献する新しいイスラーム」として、近年ヒズメット *hizmet* (トルコ語で奉仕活動) が注目されている。精神的指導者 F.ギュレンによって宗教的善行と定義されたことで、ヒズメットは多くのムスリムを巻き込んで拡大し、社会と世界に貢献すべく、競うように市民が参加するまでになった。現在、ヒズメットの特徴は、活動の内容面からは教育支援と文化交流に、方法面からは地域性／普遍性の均衡と戦略的効果性に要約できる。活動のノウハウや全般の方針を議論する *Gülen Conference* が定期的に開催され、緩やかなネットワークを形成する構造も、総体的ヒズメットの潜在力の機制となっている。本論では、宗教的伝統に依拠しているからこそ現代社会に適応し、周辺の社会関係を巻き込んで成長するヒズメットの逆説的革新性を論じる。

キーワード ヒズメット ギュレン 伝統と革新 信仰とネットワーク社会

Regarded as “innovative Islam making a contribution to global peace”, *hizmet* (Turkish for *service*), emerged from the Republic of Turkey where it was defined as religious beneficence by the spiritual leader F. Gülen. *Hizmet* has attracted attention recently because it has grown by involving a widening circle of Muslim, whose competitive pursuit of virtue prompted citizens to make contributions to society and the world. The content of *hizmet* today can be summarized as educational service and inter-cultural communication, and the method is also summarized as a balance between local and universal, and effective strategy. These *hizmet*s are united in loosely defined network by annual *Gülen Conference*: exchanging know-how and general policy. This mechanism dictates the potentiality of holistic *hizmet*. This paper demonstrates the innovative nature of *hizmet*. It has grown paradoxically, drawing in adjacent social relations by relying on religious tradition, but also adapting to contemporary society.

Keywords: *hizmet*, F. Gülen, tradition and innovation, faith and network society.

* 東京大学大学院人文社会系研究科イスラーム地域研究部門・特任研究員・
m_akutsu@1998.jukuin.keio.ac.jp

1. はじめに

1.1 活動を評価する視点：個別的・総体的 *hizmet* のネットワーク

本論は、イスラームの伝統的な宗教的価値観に啓発されて、社会的奉仕活動（以下トルコ語でヒズメット *hizmet*、個別の活動とともにその総体も意味する）に従事する、トルコ系ムスリムの一般市民を取り上げる⁽¹⁾。近年、ヒズメットは新しいイスラームとか、世界平和に貢献するイスラームとして世界的に注目されている。しかし、なぜ新しいイスラームなのか、さらにそこで指摘されるイスラームとは、個々人の信仰を規定する教義や宗教を意味しているのか、それともより包括的な性格をもつ文明論的な意味合いがもたされているのか、具体的な検討がなされていない場合が多い。本論では、そうした評価をより客観的に分析するために、歴史的にも社会的にも、イスラームが主役の座を占めたことのない、非イスラーム世界を検討の場とする。アラブであれトルコであれ、過去の歴史においてイスラームとの関連のある地域を対象とした場合にみかけられる、イスラーム社会の暗黙的な想定を避けるためである⁽²⁾。個々のヒズメットの活動の発展の典型を提示し、その特徴を分析する手がかりとして、具体的にはシンガポールとオーストラリアにおいて実施されるヒズメットの事例を中心として、さらには世界各地で開催され、ヒズメットの交流の場として機能する *Gülen Conference* も分析の対象に加えることで、総体としてのヒズメットの姿を浮かび上がらせる⁽³⁾。

現時点で、宗教間対話（異文化間交流）と教育支援の二つが、ヒズメットの活動の主要な特徴であると、当事者たちとともに周囲からも認められている。しかし、イスラームの関係する地域であろうとなかろうと、仮にある地域における特定のヒズメットの活動を取り上げて、いくら詳細に分析したとしても、それが新しいイスラームとしての姿を示すことはない。

たとえばあるグループが行うヒズメットは、私立学校を運営して質の高い教育を提供し、地域社会に次世代の人材を送り出しているだけにすぎない。また別なグループによるヒズメットは、文化的交流イベントや会食などの形をとって、異文化間交流・異宗教間対話の機会を提供するだけであって、その結果によって宗派間対立や宗教的偏見が解消したとか、あるい

は相互融和が即座にもたらされたというわけでもない。つまり、新しいイスラームであると判断できるような根拠や手がかりなどは、個々の活動のなかに直接的には認めることはできない。世界各国、どこにでもある私立学校による教育実践であり、また単なる交流イベントでしかない。しかし、個々の活動を越えた、総体としての特徴に目を向けることではじめて、ヒズメットの真の姿が浮かび上がってくる。

個々のヒズメット従事者は、競いあうかのように、教育支援や宗教間対話など、自ら選んだ目標の実現に専心する。そのかわり方も、それを生業として専従する者から、いわゆるボランティアとして、労力によるサービスの提供や、額の多少を問わず、寄付などの財政的支援によって一時的かつ断続的に活動に貢献する者など、多岐にわたっている。しかしそれらの蓄積の結果、多種多様な活動が各地に展開されていく。さらにこれらの活動それぞれは、自らが活動している地域との密接な関係の維持を模索し、地域社会との連携を構築することで、活動を持続的に定着させ、さらなる広がりをめざしている。

こうした個別的なヒズメットは、定期的開催される *Gülen Conference* とともに、日常的にインターネットを通じて、ノウハウや意見の交換が頻繁に行われることで、相互に連携した緩やかなネットワークを形成している。しかし、そもそも個々の活動従事者の出発点として、イスラームという信仰や宗教的価値観に動機づけられているという共通項を想起することで、このネットワークは単なる横の連携といった性格を超える特徴をもつことに、われわれは気づくことができる⁽⁴⁾。

1.2 宗教的動機と社会貢献：価値観に基づく社会関係

本論ではヒズメットの呼称を用いていくが、自称と他称、さらには個別で具体的な活動と同時にそれらの全体を含めて、ギュレン運動 *Gülen (inspired) Movement* とも呼ばれる、トルコ人たちの社会的奉仕活動は、思想家フェトフラー・ギュレン *Fethulla Gülen* (1941年頃-) によって啓発されている⁽⁵⁾。伝統的な方法で宗教的知識を修めたギュレンによって説かれる、イスラームの宗教に根ざした価値観に基づいて、一般のムスリムたちが自発的に活動の対象や目標を定め、それに必要な組織を立ち上げ、各種の社会的活動を展開してきた。こうした活動に従事する者たちは、特別な訓練

を受けた宗教的知識人（ウラマー‘ulamā’）ではない。活動にかかわる形態も、それを自らの専業とするような直接的な場合もあれば、自らの生計の手段とは別に、間接的にボランティアとして散発的にかかわる場合もあって、実にさまざまである。また、個々の取り組みと同時に、その総体としてのヒズメットに対しては、「よきムスリムとは何をすべきか、どうあるべきか」、ギュレン本人は啓発を続けるものの、具体的な指図は一切行っていない⁽⁶⁾。

こうして、たとえばヒズメットの二本柱の一つである教育支援を目標に、ある者たちはトルコ国内で、またある者たちは中央アジアから東欧といったトルコにとって縁の深い地域、あるいは遠く離れたアジアや北米などの国外で、（世俗の一般教育を行う）私立学校を設立し、質の高い教育を提供し、優秀な生徒・学生を社会に輩出する事業を立ち上げてきた⁽⁷⁾。それが軌道に乗ると、それぞれの地域の実情に即して、もう一つの柱である宗教間対話（あるいは異文化間交流）として、各種の文化的交流を促進する事業が隣接して増殖していき、全体としてのPR活動にも積極的に力を入れていく⁽⁸⁾。

これらの取り組みのどこをみても、イスラームの宗教を布教しようという直接的な意図をみいだすことはできないし、当人たちもそういう意識はもっていない。あるいはムスリムの信徒が、改宗によって増大しているわけでもない。また、個々人の理解している動機面を除いては、格別イスラーム的な活動を行っているともいえない。具体的には、ギュレン・スクールとも呼ばれる、ヒズメットが運営する私立学校は、どこにでもある私立の学校と大差ないカリキュラムを提供している [Balci 2003: 162 (Table 3)]。間宗教的な倫理・道徳教育による人格形成に力を入れているものの、特定の宗教を教育したりあるいは宗教者を育てたりするような学校ではない。

さらに、宗教間対話といっても、各宗教・宗派のさまざまなレベルの宗教者が集い、高度に神学的な議論が交わられるようなこともあるが、そうしたことがイスラーム側の発案による史上初の試みというわけでもない。むしろ、広く一般を巻き込んだ、会食会や交流会などの文化活動の形を取って継続されることの方が多い。さらには、そうした交流活動が実施されたからといって、当事者の動機面を除いては、イスラーム的な活動だと指摘する者は誰もいないだろうし、また何かが具体的にイスラーム的に変化し

たというわけでもない。

ある活動従事者からは、「なぜ活動をするのかと質問されたら、神に満足してもらうため rıza-i İlahi, riḍā Allāh に奉仕活動をしていると答えても、それが理解してもらえないことが多い」という苦笑にも似た言葉を聞くことがあった。別な活動従事者の理解する言葉を借りると、「ヒズメットとは利他主義である。他人に奉仕することで神に仕えることである」というように [Rausch 2009: 181]⁽⁹⁾、活動の従事者は、強い宗教的動機や価値観の探求に裏付けられていることが、個々のヒズメットを超えた総体としてのヒズメットを、イスラームとの関連性において考察する際の重要なかなめとなってくる。

個々の活動従事者は、イスラームという信仰や宗教的価値観に発して、各自の選んだ目標に従って、社会に貢献すべくある活動に専念する。その活動を実施する際には、活動地域の実情に即して、いかに自らの活動を効果的に遂行し、かつ持続させられるかが模索される。これら活動の遂行と継続のためのノウハウは、Gülen Conference や日々のインターネットによる連絡によって、情報交換される。同時にこれによって、自分たちの追求する宗教的価値観や信仰が、相互に確認され補強され、活動を競い合う姿勢が維持されることで、ネットワーク性が高まることにつながっている。

この時点で、信仰という価値観によって結びつけられ、具体的なものとして直接目にはできないものの、総体的なネットワークとしてのヒズメットが確かに存在していることを指摘できる⁽¹⁰⁾。さらにその上で、個々の活動が取り結んでいる地域社会との関係性が次に重要な鍵となってくる。信仰に基づいたヒズメットが、総体として緩やかなネットワークを形成しつつ、地域社会との関係構築を効果的に維持していることによって、世界各地に点在してそれぞれの地域に浸透していく、信仰に基づいた社会関係が維持されている事実が浮かび上がってくる。諸個人の心的なつながりによって構成される、ムスリム社会の存在を指摘することが可能となる [ジンメル 1979: 20]⁽¹¹⁾。

1.3 宗教思想的基盤：伝統に基づく革新

ヒズメットを飛躍的に発展させることに貢献した、精神的指導者であるギュレン本人は、トルコ共和国における宗務官（イマーム・ハティフ）就

任時代から、社会に貢献するヒズメットの原形となる活動の創設に着手している。現在の活動の二本柱とされる特徴のうち、特に教育を重視する姿勢は、初期からはっきりと認めることができる。宗教に関する学習の場としてデルスハーネ *dershane* (学習の場) が、さらには宗教に限られない、自然科学なども含むさまざまな学問の教育の場としてイシュク・エヴレル *ışık evler* (光の家) が、私的でインフォーマルな形で形成され、サマーキャンプなど独特な課外活動の形態によっても、多くの参加者を引きつけた。そしてそこから、次の活動を担う人材が輩出されていった [Ebaugh 2009: 27] [Yavuz 2003: 31-2] ⁽¹²⁾。

こうしたギュレンの活動を支える思想的基盤に目を向けると、何か目新しい思考がギュレン本人によって導入され、あるいは提唱されているわけではないことに注意しなければならない。たとえば、教育や知識を重視する基本的姿勢については、数多くのウラマーによって歴史的に継承されてきた、イルム *ilm* 論によって説明されていることから、ギュレンの思想が伝統に則した範囲内にあることを理解することができる [Gülen 2005: 59; Akutsu 2010: 24] ⁽¹³⁾。

しかし、こうしたイルム論は、多くの場合、イスラームの宗教的知識や学問に限定して理解されることが多くなっている⁽¹⁴⁾。ところがギュレンにとっては、一神教的伝統に基盤をもつ、地上における神の代理人 *khalīfat al-ard* と、神の摂理 *āya* の概念を用いることで、他のウラマーに見受けられる、イルム論のある種の限界が乗り越えられことになる。

コーランによると、

わしは今から地上（わが経綸の）代理者（アダムのこと）を設置しようと思う [コーラン 2:30]

と示されるように、この代理人 *khalīfa* について、存在界や生成界におけるすべてについて、できる範囲で人間がかかわろうとすること、さらには人々と社会（共同体）*umam* の関係に、人間が影響を与えるべきことを神が推奨しているものと理解できる、とギュレンは説いている [Gülen 2006b: 43]。他方、同じ一神教の伝統を保持しつつも西欧キリスト教の場合においては、こうした代理人 *stewardship* の思想は、むしろ人間の自然に対する優越、そして自然の支配の正当化を生み出した思想的背景であるとして、指摘され

ている⁽¹⁵⁾。

しかしイスラームにおいて、特にギュレンの場合は、自然を神の摂理になぞらえられる概念をあわせることによって、新しい展開を生み出すものとなっている。たとえば、以下のようなコーランの一節がある。

また（アッラー）のお手元には目に見えぬ世界の鍵まで全部揃っている。ほかの者は誰一人（その鍵のありか）を知りませぬ。陸上のこと海上のこと一切御存知で、木の葉がたった一枚落ちてでも必ずそれを知り給う [コーラン 6:59]

ここから、日々の生活や科学、社会的な立ち振る舞いや世界の創造、過去と未来など、コーランには人間が必要とするあらゆる情報が含まれている。それゆえコーランを理解し、そこから恩恵を得ようとする者は、それに合わせた努力をしなければならない。「人間はそれぞれ自分の努めた分だけが点になる」 [コーラン 53:39] と、ギュレンによって説かれる。当然、こうした努力には、信仰箇条（六信五行）の遵守も含まれるが、深い海を探検するかのように、飽きることなく学び続ける姿勢も必要であると、ギュレンは強調する [Gülen 2004: 123; Gülen 2006a: 229] ⁽¹⁶⁾。

たとえば、化学や物理学、医学などの実学を修めた者が、社会に出てその職分をまっとうすることは、必然的に社会に対して、各自の専門的知識に応じたなんらかの具体的な貢献をすることになる。それは、どこの国や地域にもある、あたりまえのことでしかない。

しかし、ギュレンの啓発によって、こうした実学を修得し、その知識に応じた専門的活動を行うことは、ムスリムにとって宗教的善行と意識されることになる。活動従事者個々人のヒズメット理解として先に示したように、神に対する奉仕 hizmet を行っているという意識のもとで、いわゆる宗教的知識の分野に限られない、多様な利他的活動への取り組みが促進される。一方で伝統的なウラマーにおいては、非宗教的な学問を排除する傾向にあった従来のイルム論の限界を、何か革新的なものによってではなく、むしろ埋もれた伝統的思想を用いることで克服されている点に、革新的な影響を生み出す背景があるとして注意しなければならない。伝統に即しながらも革新的な影響力を発揮する、逆説的ではあるが、総体としてのヒズメットのもつ根本的な特徴の一つがここにある⁽¹⁷⁾。

以下本論では、活動に従事する個々人の動機、活動の社会への働きかけや社会との関係性の構築、そしてネットワークとしての総体、三つの観点に留意しながら、非イスラーム世界において構築されるイスラーム的色彩を帯びた社会関係の拡大の推移の事例を検討していく。

2. シンガポール：ヒズメットの開拓

エスニシティと宗教が複合する状況のなか、多人種主義を標榜し、その調和を目指すシンガポールにあって、イスラームは仏教に次いで第二の宗教・宗派を占めており、街角でモスクを当たり前のように目にすることもできる。しかし、ムスリム住民の多くはマレー系であって、ヒズメットを促進する主要な担い手であるトルコ系というエスニシティは、この地にあってはなんら重要な意味をなしていない⁽¹⁸⁾。近年、経済発展が順調なトルコ側本国にとっては、東南アジア地域の経済的重要性の認識が高まってはいるものの、実際に現地に滞在するトルコ系の留学生や研究者は、いまだ圧倒的な少数に留まっているのが現状である。

こうした状況にあって、シンガポールのトルコ文化センター *Turkish Cultural Centre* は、1999年に創立され、現在は両国間の相互理解を促す各種の文化活動を行いながら、ヒズメットの活動を幅広く拡大していこうとする、いわば開拓期に位置づけることができる⁽¹⁹⁾。

センターの活動を維持・運営する費用は、定期的で開催されているトルコ語教室やトルコ料理教室など、いわゆるカルチャースクールの受講費が収入源の一つとなっている。さらには、異文化交流を促進する事業として、両国間の観光代理店業務 *Inter Cultural Trip to Turkey* も行っており、これが活動費用の半分を賄うことに貢献している。

定期的な講座以外に、トルコとシンガポール双方に縁のある祭礼や儀礼の機会などで、臨時のイベントを開催するような場合、地元財界に寄付を募ることもある。寄付を打診された側には、重要な寄付対象先であると認識してもらえる程度には、センターの存在と活動は認められているという。地元社会や経済界などとの関係構築に積極的なヒズメットの典型的な姿勢が、ここから理解できるだろう。

今後のセンターによる事業拡大の一つとして、大学など高等教育レベルで、トルコ語寄付講座の開設に向けた計画が、現在進行中だという。その布石として、高等教育レベルでのレクチャーや異文化交流 Dialogue Event の企画も、これまで数多く実施されてきている。

トルコ系のプレゼンスが意味をなさない状況のなか、ヒズメットを実践してく上で特に重視している点について質問をすると、「交流 socializing を続けることが肝要だ」という言葉を、エスキジ所長から聞くことができた。龐大なギュレンの著作のなかで、例えていえば広大な砂漠のなかの一粒の砂でしかないが、『神の使徒：ムハンマド The Messenger of God: Muhammad』を座右の書とする、と答えたエスキジ所長もまた、ギュレンの教えに感化され、ムスリムとしての宗教的動機をもってヒズメットにかかわっていることが理解できる。

しかし、このような個々のヒズメットをいくら詳細に分析しても、それが新しいイスラームなのか、あるいは世界平和に貢献するのかといった評価は、直接的に判明することはないと先に指摘した。それは、活動がまだまだ発展途上にあるシンガポールの事例だからというわけではない。むしろ、発展途上にあつたとしても、宗教的動機をもって、教育や異文化交流事業を實踐し、活動地域と関係を構築することによって、活動の持続性を維持しようとする姿勢から、ヒズメットの典型的な特徴を示す事例として理解することができる。

そこで次に、こうした開拓期を過ぎて、活動が定着していく途上に移行しつつあるオーストラリアの事例で、イスラーム的観点における総体としてのヒズメットの考察が不可欠である点を検討していきたい。

3. オーストラリア：ヒズメットの定着と拡大

3.1 移民社会におけるトルコ人コミュニティの位置づけ

シンガポールと同様、エスニシティと宗教が混在する移民社会オーストラリアにあつて、トルコ系はやはり圧倒的な少数派に位置づけられる。家庭で使用される言語調査の結果からみても、トルコ語が上位にランクすることはない⁽²⁰⁾。宗教・宗派別構成をみても、減少傾向にあるものの、キリ

スト教各派がいまだ 6 割強を占めている。そして、非キリスト教諸派のなかでも、イスラームはわずか 2%弱でしかない⁽²¹⁾。さらに、2005 年クロナラ暴動が示すように、西側社会に蔓延するイスラモフォビアが暗い影を投げかける、ムスリムにとっては深刻な状況にあることが理解できる⁽²²⁾。

主に工場労働者として、トルコ系移民労働者がオーストラリアに流入したのは、1950 年代にまで遡る。しかし、移民を送り出したトルコ本国側からみても、こうした海外への労働者の移民先として、オーストラリアが上位にあるわけではない⁽²³⁾。

今回実施したシドニーとメルボルンの調査では、現地で活況を呈しているヒズメットを支えてきた第一世代からその子孫の世代まで、直接に話を聞くことができた⁽²⁴⁾。そうした人々のなかの一人である A 氏は、幼少時、アナトリア中央部の都市から、父親に手を引かれ、家族とともに陸路バスでイスタンブルに移動した記憶をとどめている。そこから、ギリシアとシンガポールを空路で経由して、数日後の昼前によくオーストラリアのメルボルンの工場に到着した。提供された昼食を取った父親は、即座に工場労働に配置されたことを、A 氏は鮮明な記憶をもって語ってくれた。成長した A 氏はその後、朝は牛乳配達、昼は工場労働と、働けることはなんでもやった、仕事はいくらでもあったよい時代だったと振り返る。いまや A 氏は、孫世代とともに、市内の一等地に瀟洒な邸宅を構えるまでになった。

3.2 活動の発端と定着の事例

イシク・カレッジとセリミエ財団（メルボルン）

経済的余裕ができた現在では、頻繁に母国を訪れる機会はあるが、生活の拠点がオーストラリアにあるため、母国に永住帰国することはないだろうと、A 氏は寂しそうに語った。10 代になる A 氏の孫娘は、家庭の言語としてはトルコ語を話すことができるものの、「夜に夢を見るときは、英語で夢を見るの」と語ってくれたように、第二世代や第三世代たちが母国の文化を失うことに対する危機感が、トルコ人移民たちに共通した問題として意識されている。

こうした要望があるなかで、メルボルンのイシク・カレッジ *Işık Collage*（ビクトリア州ブロード・メドウ *Broad Meadow* 地区）は、トルコ系の子弟たちを対象に、オーストラリア社会に適応させつつ、母国の伝統や文化を

次世代に受け継がせようと立ち上げられた⁽²⁵⁾。英語もろくに話せず、本国の伝統や文化も中途半端なまま、現地社会に埋没してしまった第二世代の苦い経験をもとにしての決断だった。それらを財政的に支えたのは、決して、A氏のような余裕のある者だけではなかった。

調査で訪問した時点で、イシク・カレッジは初等・前期中等部（小中学校）に 500 名、後期中等部（高校）に 400 名を超える児童と生徒が在学し、90%をトルコ系の子弟が占めている。最新の状況として、中国系非ムスリムの子弟もわずかながら在籍するようになった。私立学校としては、中流階層が子弟を通学させられる程度の学費設定をしており、質の高い教育と多文化主義に基づく教育方針が、多くの移民家庭の関心を引きつけているものと学校側は分析している⁽²⁶⁾。

現在は、政府からの援助を受けられる正式な私立学校となっているが、創立当初は在豪トルコ人たちの寄付だけで成り立つ私塾扱いで、母国からの財政的支援なども当然なく、非常に困難な状況にあったことを、学校運営を支えるセリミエ財団 **Selimiye Foundation** で聞くことができた⁽²⁷⁾。

財団で働くタルハ氏の理解では、ヒズメットとは他の人の導きとなることだという。そして必要とされる教育や知識を提供することが、私にとってのヒズメットだとも言う。一方、同校の初等部校長のアリー氏は、学校教育における教科教育を提供するだけでなく、あらゆる面で模倣されるべきモデルとなることが、私のヒズメット理解だと、語ってくれた。

学校として正式に認められたのが 1997 年。それ以来、学校から巣立った生徒が、いまや教員として学校に戻ってきてくれたと、嬉しそうにアリー校長は語った。

シューレ・カレッジとフェザー財団（シドニー）

シドニーのシューレ・カレッジ **Sule College**（ニュー・サウス・ウェールズ州、プレストン・キャンパス **Preston Campus**）は、運営母体となるフェザー財団 **Feza Foundation** が 1994 年 1 月に組織され、寄付を募って郊外の荒れ果てた農地を格安で購入し、文字通り関係者自らの手作りで創建が着手された。

翌 1995 年、許認可の暫定措置を得て、わずか 2 クラスで学校として出発し、1996 年には政府の正式な認可を受けた⁽²⁸⁾。現在、小中学校で 500 名、

高校で 350 名、高校女子部 300 名、幼稚園も含めると、在籍する児童・生徒は 1700 名を超え、三つのキャンパスをもつ巨大な私立学校に成長している。

創立当初、児童・学生の 98% がトルコ系の子弟だったが、現在は 45% までその比率を下げている。多様な移民の混在する地域に学校が位置しており、そうしたなか各移民家庭の子弟を引きつけていることが、このような数値として表れるようになった。その背景としては、一定の宗教・宗派に偏らない倫理・道徳教育とともに、質の高い教育の提供が、保護者から高い支持を得ているのだと、学校側は分析している。実際、学校教育の面においては、非常に高い学業成績を達成しており、2010 年の HSC (High School Certificate、大学入学資格試験に相当) では、学校の所在する地域内ではトップクラスの成績で、98% の大学進学率を誇っている⁽²⁹⁾。

教育によって啓発され、社会で活躍できる世代を生み出したいという方針のもと、家族や地域社会において倫理観をもって行動できる人間、オーストラリア市民社会に参画できる人物の育成が、同校の教育理念として掲げられている。

こうした理念を実現する一つの具体的な手段として、学校では家庭訪問を積極的に実施している。子供の教育に保護者の関心を引きつけ、積極的に巻き込もうという意図からの措置だというが、こうした措置は地域では珍しい取り組みだという。また、放課後活動などの科目教育以外にも重点がおかれ、言語教育や異文化体験、社会奉仕活動などの課外活動も用意されているのが大きな特徴となっている⁽³⁰⁾。

学校説明に対応してくれた財団の職員たちの間では、自分たちの活動はヒズメットとして啓発されているという意識が共通してあり、代表して学校説明を行ってくれたアフメット氏にとっては、『無限の光 *Infinite Light*』がお気に入りのギュレンの著作だと語ってくれた。

4. 総体的ネットワークの評価：ヒズメットとムスリム社会

シドニーのシューレ・カレッジのオーバーン・キャンパス Auburn Campus の近隣には、アフィニティ異文化間交流財団 Affinity Intercultural Foundation がある。在豪ムスリム青年たちが設立したいくつかの組織が、2001年に統合して設立されたもので、誠実、奉仕 Service、協議、高潔、相互依存、積極的な行動、調和の七原則のもと、オーストラリア社会との調和を促進し、偏見や誤解の解消を活動目的として掲げている⁽³¹⁾。



Fig.1



Fig.2

事務所の近隣にあるオーバーン・モスク Auburn Gallipoli Mosque (1979年創立起源) [fig.1] には、毎週金曜日、多様なエスニシティのムスリムが集団礼拝にやってくるが [fig.2]、参列者による不法な路上駐車に苦情が寄せられている [fig.3]。財団では、こうした迷惑行為がないよう意識啓発に取り組んではいるが、エスニシティの多様さにより、説得には時間がかかるという。こうした身近な問題に取り組むと同時に、24時間体制の監視カメラがモスクに設置されているように [fig.4]、国内には宗教・宗派対立にかかわるより深刻な事件も多数発生しており、同財団が危機感をもって取り組むべき宗教間対話の活動は山積している状況にある。

移民社会のなかの少数派にあつて、ましてイスラモフォビアが広がる現状においては、安易に、ムスリムが自らの宗教的価値観を全面におし出すことが招く結末など、当事者が一番よく痛感している。しかし、ギュレンの思想によって啓発されたヒズメット従事者たち個人は、宗教的価値観によって動機づけられつつも、二本柱と言われる教育支援と宗教間対話を、組織としていかに効果的に実施していくか、それによっていかに社会に対して現実的な影響を与えられるかを、日々模索し追求している。



Fig. 3



Fig. 4

前述した教育面の活動について振り返ってみると、先に挙げたイシク、シューレ両校には、高い教科教育の実績を示している点だけでなく、倫理・道徳面の教育や、実社会への適応能力をもった人材育成という基本姿勢が共通している。そして、優れた教育結果を残すためには、崇高な理念を掲げるだけではなく、具体的な教育方法に関する技術的向上が、当然ながら要求されてくる。実際、シューレ・カレッジは、教科教育の能力についてはいうまでもなく、生徒・学生とのコミュニケーション能力をも、教員に期待している。

また、イシク・カレッジの場合、卒業生が教員として採用されるまでになったことは前述したが、そうした例に限らず、さまざまな分野で、両校が社会に人材を提供し続けていることから、教育の再生産機能面から考えても、社会に対して実効的な貢献を達成していることは、十分に指摘するに価するだろう⁽³²⁾。

その一方で、異文化間交流あるいは宗教間対話の活動においては、具体的な活動の結果が、教育の場合のように目に見える形で示されることがない。それゆえに、交流事業 *socializing* を継続することが不可欠だ、という意見を持つ、シンガポールのエスキジ所長の姿勢が重要な鍵となってくる。その上で、持続的な活動に取り組むためには、財政面は当然ながらも、地域社会のさまざまなバックアップが必要となり、そのためには高い交渉能力と日頃の関係構築の姿勢が重要な意味をもってくる⁽³³⁾。

さらに、持続的な活動という点では、Gülen Conference が象徴的な機能を

果たしている。これは、ヒズメットに取り組むメンバーだけでなく、ヒズメットに注目する研究者や他宗教・他宗派の宗教的実践者を交えて、毎回の個別テーマに基づいた学術的会議として、世界各地で開催されるものである。ヒズメットの特徴的二本柱である、教育と異文化間交流（宗教間対話）の主題のもと、教育なり文化交流なり、より具体的な副題が設定された上で、それぞれの活動を実践する者たちの活動の結果報告や体験談、さらには比較宗教学的な観点による学術色の濃い報告、あるいは他宗教者からの助言や意見交換などが、公式の会議の場で取り扱われる。

こうした会議を実現するにあたっては、多くの場合、大学などの受け入れ側機関との共催の形がとられ、そのためには事前の交渉と準備のための関係構築が不可欠であり、恒常的な連携が維持される。これらの背景すべてを含めて、会議に参加者したヒズメット従事者たちの間で情報として交換され、相互交流の場として機能し、地域を超えた世界各地のヒズメットの活動継続のためのノウハウの共有に貢献していく機能が、Gülen Conference によって確保される。

教育であれ宗教間対話であれ、個々の活動だけを見てはヒズメットの真の姿は見えてこない。あるいは、活動に専念する個々人が、イスラーム的価値観によって啓発されているからといって、その総体がイスラーム的であるというのも短絡的すぎることには、同意を得ることができるだろう。そうではなく、イスラームの宗教的価値観によって啓発された人々が、実社会に対して実効的な奉仕活動に取り組み、その活動を持続させるためにも、活動地域の社会と深い関係を結んでいく。こうした活動は常に、目に見える形はとらないものの、確実に存在する総体として、情報と意見が交換され、世界各地でネットワーク化されていく。

こうした総体を支える個々人はというと、すでに示したように宗教的価値観に動機づけられている。つまり、イスラーム的価値観によって社会関係が構築され、その関係によって社会に新しい人材が再生産され、さらには既存の他の社会関係との交流 *socializing* が取り交わされ拡大していく。こうした特徴は、歴史的に展開されてきた、イスラームの価値観によって構築されてきたネットワーク社会を、現代に合致した網の目として新たに編み直したものとしてとらえることができる。

5. おわりに：ムスリム社会の編み直し

イスラームの宗教的伝統として継承されてきた価値観に裏付けられながらも、新しい時代と社会情勢に対応しつつ、「新しい伝統」を生み出していく革新的な可能性を秘めた総体的なヒズメットの発揮する性格は、一見して「新しいイスラーム」とみなしてしまうという表面的な誤解を生むかもしれない⁽³⁴⁾。

これまでみてきたように、ヒズメットは、現代社会において必要とされる、一見して宗教とは無関係のさまざまな教育などの文化的活動（教育支援）を、地域の実情に根ざしつつ（文化交流）、効果的かつ継続的に行うことによって（戦略的効果性）、社会関係を構築し、地域を超えてネットワーク化していく（地域性／普遍性の均衡）。

こうした活動に従事する個々人の動機付けや教義理解のレベルはさまざまであり、決して統一がとれたものではない。ヒズメットの個別の活動を統括する、厳格な指揮系統などはなく、ましてそれが特定の教義として明記されているわけでもない。より根源的で、規範的な宗教上の教えによって触発され、互いに善行を競い合う、緩やかで目に見えないネットワークを形成しているのが、総体としてのヒズメットである。

教育なり文化交流なり、ヒズメットとしての個別の活動によって、一定の価値観によって築かれる社会関係は、イスラームとはまったく無縁のオーストラリアやシンガポールといった現代の非イスラーム社会において、その意味を増してくる可能性を十分に秘めていることは、教育による人材の再生産、交流を継続しようとする姿勢の点で、先に示した通りである。しかし、中東・アラブ・イスラーム研究の文脈からは、こうした総体としてのヒズメットは、革新というべきではない。国家の存在を全面的に否定まではしないが、だからといって国家があれば社会が必然的に伴うといったような楽観論を超えて、宗教的価値観をどう実社会に適応させるか、その結果社会がどうイスラームの色に染まるか、預言者ムハンマド以降の歴史の各段階において取り組まれてきた難題そのものが、研究者には忘れ去られ、ムスリム当事者たちには明確に意識されていないことが多い [Akutsu 2013:114] ⁽³⁵⁾。

人間に限らず、神に創造された存在は、ギュレンによると、以下のよう
に説明される。

太陽と空気から人間に至るまで、たくさんの他の被創造物と関係を
持つこともできます。それゆえ、生命はアッラーの多くの御名が会
うところであり、それらすべてが集中する中心なのです [ギュレン
2007b: 25]。

ギュレンの依拠する、コーランに凝集される一神教的信仰（タウヒード
tawhīd）によって、異教徒との関係、家族関係、国政の問題、果てはジェン
ダーから人工妊娠中絶の問題まで、ありとあらゆる社会的次元の出来事が
理解されて定義され、そして実行されていく。これはまさに、

「究極の一」である神が宇宙万物の創造主だとする立場こそ「タウ
ヒード」なのです。やみくもな画一化ではなく、個を大事にして観察
しつつ、多様性を見分け枚挙し、多を多として科学的に研究すればす
るほど、統合的視点（信仰の面では神の唯一性の確信）に導かれるの
だとして、世界の多様性を徹底的に強調する立場だといえます」 [板垣
2004: 28] ⁽³⁶⁾。

と指摘されるような、多様性を伴った一神教の信仰に基づく社会（*tawhīdic
pluralism*）であって、それを成立させ、かつ存続させるためには、その都度、
必要とされる新しい知識を吸収し、効果的に利用し実践していかなければ
ならない。イスラームの価値観によって、現代に必要な知識をもった人材
が生み出され、それらが社会関係を構築し、地域に根ざしつつ拡大してい
く総体としてのヒズメットは、まさに現在に合致した形で再編された、革
新的ではあるが伝統的な、ムスリム社会の一つの形とみなすべきであろう。

宗教に対するヨーロッパ社会の固有の背景から、社会的次元での宗教の
役割についての再考がなされる一方で、同様にアラブ・イスラーム社会の
考察を行うに際しては、ヨーロッパ的事実が絶対的に適用されなければなら
ない理由はない ⁽³⁷⁾。信仰に基づいた実践的な社会発展の方法論として、
ネットワークの網の目を編み直すべく生み出された総体としてのヒズメッ
トが、ヨーロッパや日本とは別な次元の社会に貢献する宗教の一つの形を
示している ⁽³⁸⁾。

註

- (1) *hizmet* の語源はアラビア語 *khidma* だが、『コーラン』(井筒訳)で補足されているように、神への奉仕や宗教的献身という一般的な概念として以外に、特別な用法としての具体的な言及はない。「信仰に入って正しい業に精進する人々、そういう人々には十分に報酬を下さるばかりか、なおその上にあちらから沢山お恵みを加えて下さるであろう。しかし(神への奉仕を)潔しとせず、偉ぶる者どもは、やがてアッラーからひどい罰を頂戴しようぞ」[コーラン 4:173]。また、ヒズメットの活動の中心的な担い手は、宗教的知識人(ウラマー‘*ulamā*’)ではないという意味で、一般市民 *citizen* という表現を用いる。なお、口語的例外を除いた、アラビア語やトルコ語のカタカナ・ラテン翻字は、[大塚他 2002]の方式に倣う。
- (2) 憲法でイスラームを国教と公式に定める国家とか、あるいはイスラーム諸国会議機構 OIC やイスラーム世界連盟 *Rābiṭa al-‘Ālam al-Islāmī* に加盟しているような、宗教的、文化的、政治的にイスラームが看過できない要素となっている国や地域を想定した上で、それらに含まれない国や地域を総称して、暫定的に本論では非イスラーム世界とする。その上で、本論で扱うヒズメットとの関係で、たとえばトルコはイスラーム社会である、という暗黙的な前提を出発点とするのではなく [小田 2011:70]、むしろムスリム社会とはなにか、それがどう再構築されるかを主要な論点とすることは避けられない [Akutsu2013:116-117]。これによって、イスラーム世界の用語の用法上の混乱の生み出す学問的問題点についての指摘 [羽田 2005:13]、あるいは 20 世紀以降のイスラーム復興をどうとらえるか [小杉 2006:9-16] といった研究上の問題に、一つの回答をすることも狙いとする。なお、トルコ国内の背景に焦点を当てたヒズメット(ギュレン運動)については、[幸加木 2011] その他が論考を進めている。
- (3) この会議は、北米やヨーロッパ、それ以外の地域で毎年開催され、会議では研究者としてのアプローチ、活動に従事する者の視点からの報告がなされる。公式サイト <http://www.fethullahgulen.org/> (2013 年 3 月初旬、以下同)を参照。なお著者は、”East and West Encounters: The Gülen Movement,” University of Southern California, Los Angeles, CA, U.S.A. (2009); “The Significance of Education for the Future: The Gülen Model of Education,” UIN Syarif Hidayatullah State Islamic University, Jakarta, Indonesia (2010); “From Dialogue to Collaboration: The Vision of Fethullah Gülen and Muslim-Christian Relations,” Australian Catholic University, Melbourn, Australia (2011)の三つの会議に傍聴あるいは報告者として参加した。会議内外の機会を得た情報や意見も、本論に反映されている。
- (4) 非イスラーム世界におけるヒズメットとして、日本にも日本トルコ文化交流会 (<http://www.nittokai.org/>) などがあり、2011 年 3 月東北地方太平洋沖地震での緊急人道支援や、日常的な文化交流や教育活動も行っている。総体としてのヒズメットの分析を狙いとする本論を作成するに至るまでには、重要情報の提供など大きな貢献を受けたことをここに記す。日本トルコ文化交流会の個別的な取り組みの紹介は、別な機会に行いたい。
- (5) 宗教的知識人である父とその人脈を通じて、伝統的な方法(師弟関係)で宗教に関する教育を受けた幼少期について、[Ebaugh 2009: 23-24; Gülen 2000 : ii-iv]

を参照。世界的な知識人として、ギュレンに対する関心の高さについては、[Prospect ;GYV] を参照。なお生年には別説もあるが、本人が所有する身分証明書には 1941 年と記載されているという。

- (6) トルコ国内においては、世俗主義（ラーイクリキ）の観点から、この活動を憲法違反とみなそうとする人々からの圧力がある。建国以来の世俗主義については、[White 2008: 357 ; 澤江 2005:36 ; 内藤 2012:6] を参照。一方、その他のイスラーム世界からは、異端的というニュアンスを暗に込めた奇異の目から、フェトフラージュ Fethullacu（フェトフラーの党派・教団）と呼ばれることが多い。そのため当事者たちは、Gülen (inspired) movement に代わって、hizmet という呼称を用いようとしている。トルコ国内で思想犯としての逮捕も経験したギュレン本人は [Ebaugh 2009: 31-32]、病気治療を理由に、1999 年アメリカ合衆国に渡り、そのまま居住を続けている [CBS 2012]。
- (7) 1982 年、国内の都市イズミルとイスタンブルを皮切りに [Ebaugh 2009: 29]、中央アジア諸国（トルコ語使用圏）では、1992-933 年に学校の設立が始まり、1998-99 年には 75 校にまで拡大した [Balci 2003: 154-5, 157 (Table 2)]。その他、中央アジア以外のユーラシア地域では、149 校まで拡大したとする統計もある [Balci 2003: 156 (Table 1)]。
- (8) 教育や科学、宗教をテーマとした論考を集めた定期刊行物や、ギュレンによる啓発書や音声・録画の発刊には積極的で、その後は新聞（ザマン Zaman 紙買収）や TV 局（Samanlyolu TV）の創立まで発展した [Ebaugh 2009: 30-31; Yavuz 2003: 35-6]。こうした関連事業の発展ゆえに、それらを担う新たなブルジョア層（Anatolian Tiger）の出現も指摘されている [Yavuz 2003: 37]。なお、地域事情によっては、宗教間対話というよりも、異文化間交流とした方が適切な場合もある。この点は、本論でシンガポール、オーストラリアの事例からも指摘する。
- (9) 当人によるヒズメットの理解として、現世（世俗的）利益を超越する価値観を見出す多くの声がある。ギュレン本人の示唆によるとヒズメットとは、来世にとって意味をもつ、他人のために奉仕することでイスラームに人生を捧げることとされている [Yavuz 2003: 59]。
- (10) 「人間を意のままに型どり、人間の行為を支配するあの宗教的・政治的・道徳的信念をわれわれのなかに植え付けたのも、社会」[デュルケム 1985 : 252] というように、宗教の社会的統制力を喪失し、アノミーに陥った近代社会には [作田 2001: 195 ; デュルケム 1985:194]、儀礼などの表面的な相違を超えた、「人が世界と自己とについて行った表象の最初の体」であり、精神そのものを形成する機能をもつ宗教 [デュルケム 1975: 29] が必要とされる。まさにこうした役割をもつ宗教が、個別的なヒズメットを超越した総体としてのヒズメットの形成に作用している。この観点からすると、心 qalb や改悛 tawba などの神秘主義的要素を示唆するタームがギュレンの思想に見いだされるが [Saritoprak 2003: 158]、かつてのスーフィー教団やその神秘主義思想とは一線を画した、社会的な用法が特徴として指摘できる。こうした社会の現実に対応する spiritual な戦略については、インドネシアで先駆的な取り組みが活発になされている [青木 2006]。ナフダトゥル・ウラマヤムハマディヤらによる spiritual なアプローチによる現実的社会問題への対応として、今後比較検討を行いたい。

- (11) 道徳による抑止と魅惑を分析するデュルクムの道徳共同体論は、社交やつながりによって、個人と全体の関係を把握しようとするジンメルの方との関連性が認められることは、[土井 2003: 170] を参照。
- (12) Yavuz によると、参加者たちの絆を活性化する、フォーマル・インフォーマルな諸関係の網の目 web として、ギュレン運動をイメージするとわかりやすいと指摘されている。
- (13) 「ものの分かった人間 ya‘lamūna と、わけのわからぬ人間とが同等かね」[コーラン 39:10]、「心からアッラーを畏れかしこむのは、本当にもののわかった人々 ‘ulamā’だけである」[コーラン 35:28] というコーランの章句は、宗教的観点から知識 ‘ilm (上記 ya‘lamūna とウラマー ‘ulamā’は、知識を意味する ‘ilm と同語根の単語) を称揚する際に引き合いに出され、ギュレンも引用している。過去に遡ってみると、たとえばガザリー Abū Hāmid al-Ghazālī (1111 年没)、Ibn Qayyim al-Jawziya (1350 年没) など、同じ部分を引用していることから、思想的にギュレンは伝統の延長線上にあることが確認できる。
- (14) 信仰上の価値観から絶対視される、来世に関わる宗教的知識を、時代によって移り変わる社会的状況のなかでどのように追求し実現するか、そのプロセスにおいて生じるムスリム社会、という観点については [Akutsu 2013] で扱った。
- (15) たとえばジョン・ロックの理解では、「神は人間を造り、他の動物の場合と同じように人間のうちに自己保存への強い要求を植え付け [……中略……] 自らの計画に役立つ、食料、衣類、その他の生活必需品を世界に配剤した [……中略……] 彼の存続に役立つ彼の保存の手段として与えられたものを利用できるようにした」が、人間のなかの神の声としての理性が調和を失って相互に衝突し、秩序が損なわれたと指摘される [ロック 2010:166-167; テイラー 2011:19-20]
- (16) そのため、自然の法則などわれわれの身の回りのすべてを解明しようとする自然科学は、神の意図を知ることと等しく、神を満足させる宗教的善行であると理解される [Gülen 2006a: 233-4]。本論注 10 で言及したように、同様に神学的自然観を出発点として、環境問題などの現代的課題に宗教的に対応しようとするインドネシアの事例とともに、今後比較検討を行いたい。
- (17) 神の摂理としての自然観は、コーランに見いだすことができ、伝統的思想にあるものだった [木場 1994: 14-5]。むしろ積極的に、信仰の根本原理に従った自然界の理解が推し進められていた [井筒 1991: 84]。ギュレンによって指摘されているが、西欧キリスト教の場合で言及される宗教と科学との対立とは、実際は科学者とカトリック教会との対立であって、コペルニクスやガリレオらが反宗教的だったわけではない [Gülen 2006a: 234]。西欧キリスト教の場合も、合理主義・非合理主義という対置のなかで、社会的領域と宗教との関係について思想的模索があったことは、[ベラー 1974: 81] で示されている。むしろヨーロッパの場合でも、新旧各派ともに神による自然世界の見方が、科学の発展に貢献したという考え方が示されている [村上 1980: 37; 佐々木 1995: 上 122]。そのため、思想そのものの有無ではなく、社会的現象として発展しつつあるヒズメットを、神学的自然観から実践的に啓発しえた点を特徴とみなすべきだろう。

- (18) シンガポールの最大宗教・宗派は仏教で4割強を占め、イスラームは14.9%となっている。エスニシティは、華人、マレー・インド系で9割強の圧倒的多数を占めている（いずれも2004年データ）[自治体国際化協会2005:4]。
- (19) <http://www.turkishcentre.com/>。センターでの聞き取り調査は、2011年11月下旬実施。
- (20) 人口全体の26%が国外生まれである移民社会オーストラリアでは、出身国別比率は、英国とニュージーランド二カ国が上位を占め（両国で約8%）、次いで中国（除く香港）、インドなど近隣アジア諸国が増加傾向を示している。上位15カ国のなかにトルコは含まれていない（オーストラリア統計局2007-8年統計）[自治体国際化協会2011:1]。家庭で使用する言語に関するデータでも、上位10カ国にトルコ語は含まれていない[自治体国際化協会2011:3]
- (21) 最大宗教・宗派はキリスト教（カトリックと英国教会）で64%を占めるが、比率は減少の傾向を示している。それ以外で最多は仏教で2.11%、次いでイスラームは1.71%となっており、数値上は圧倒的に少数であるが、近年は増加傾向を示している（オーストラリア統計局2008年統計）[自治体国際化協会2011:2]
- (22) 2005年12月シドニーで発生した、レバノン系など中東出身の住民に対する暴動で、シドニー人種暴動事件とも呼ばれる。イスラモフォビア Islamophobia の起源は明かではないが、「イスラーム恐怖症」などと訳され、西側諸国のイスラームに対する誤解や偏見などの次元から、暴力を伴った中傷や憎悪犯罪に至るまで、2001年アメリカ同時多発テロ事件以降、社会的に顕著となっている。
- (23) 2003年のトルコ政府調査では、350万人以上が国外で移民として生活している。本国からの主要な移民渡航先は、85%がヨーロッパ（300万人）であり、その過半数（200万人）がドイツとなっている。次いでロシア連邦、中東と続き、さらにオーストラリア、カナダ、アメリカの3カ国で合計8%（30万人）となっている。[Kirişci 2008: 191-2]
- (24) 聞き取り調査は、2011年11月下旬実施。
- (25) <http://www.isikcollege.vic.edu.au/>
- (26) 学生の99%が国内大学に進学する実績を誇る。交換留学協定があるために、直接、欧米の大学に進学する学生は少なくなっている。
- (27) セリミエ財団の創立は1988年まで遡り、いくつかのNPO組織が1992年に合併して、現在の形になった。<http://www.selimiye.com.au/>
- (28) <http://www.sulecollege.com/>
- (29) 2010年HSC（High School Certificate＝大学入学資格試験に相当）の結果の一部として、例えば英語は、advance、extension、standard、数学はextension、generalの該当者のみ、つまりそれ以下の低評価を受けた生徒はいないという。
- (30) 以下のような表現が、教育理念 vision として示されている。The central aim of Sule College is the achievement of academic and creative excellence, and the nurturing of moral and socially responsible students so as to enable them to participate as informed, active, caring and contributing citizens in our democratic Australian society.
[<http://www.sulecollege.com/index.php/about-sule/our-vision>]
- (31) <http://www.affinity.org.au/>。七原則のなかの奉仕についてみると、神に対する奉仕と同時に人類への奉仕が謳われており、先に示したヒズメットの解釈に通じる理解が示されている。

- (32) 教育の再生産機能については、2010年にジャカルタで開催された Gülen Conference で指摘したが、その根本的な面として、イスラームの宗教的価値観が介在していることが重要である [Akutsu 2010: 16]。また、再生産された人材が、事業の推進者や財政的支援者など、さまざまな形で、さらなる活動の発展を担っている点も重要であろう。
- (33) シンガポールのトルコ文化センターの場合、少数派にもかかわらず地元経済界からその存在を認識されていることは前述した。アフィニティ財団の場合、財団顧問にはエスニシティや宗派を超えた人材をそろえ、やはり地域社会とのつながりを重視している姿勢が認められる。
- (34) 本論第1章第3節で示したように、信仰上の観点から、究極の価値を付されるコーランの含む知識は包括的であり、絶対的であり、そして揺らぐことはない。しかし、社会的な次元にたつ人間は、その対極に位置づけられる。そのため、宗教的に課された目標を、この世における存在としての人間の社会的行動とをどのように統合するかが重要となってくる [Gülen 2004: viii]。過去のイスラーム知識人の一人であるイブン・ハルドゥーン理解では、信仰に発する社会的次元の知識を発展させ、人類が繁栄しないと、地上における神の代理人としての宗教的責務が損なわれると指摘されている [阿久津 2011:189]。
- (35) 先に指摘したように、本論では暫定的にイスラーム世界としたが、国家などの枠とは別な次元で、社会がどうイスラームの色彩を帯びるかを考えなければならない。この点はギュレンも同じ考えをもっていると思われ、「イスラーム世界という世界は存在しません。個々のムスリムとしての生活があるだけ」[ギュレン 2007a:16] と述べている。なぜなら、「完璧なムスリムとは他者と関係を保つと同時に個を形成し、共通の問題を解決し、宇宙万物を解釈し、クルアーンをもって宇宙万物を理解することができ、将来を上手く見通すことができ、そして将来に向けた様々なプロジェクトを立案でき、未来像を明確に表現できるようなムスリムです。しかしそのようなムスリムが存在しないこの世界において、私はイスラーム世界が存在するとは言い得ません」[ギュレン 2007a:16-7]。
- (36) 「枚挙の論理に基づく森羅万象の個別性・差異性を認識することが不可避的だということについての徹底的な強調」[板垣 1992: 418-9] に基づいた、タウヒード（一神教的信仰）が、イスラームの基本であるとも指摘され、それを「多即一」的な思考と定義する[板垣 2011:208;板垣 2012:7]。
- (37) たとえば、狂信的信仰によってテロなどの破壊的活動を行うムスリム過激派について、「宗教が、狂信者たちが拠り所とする〈道徳的確信〉と〈絶対的なもの〉をよりたくさん生み出す源である」[デネット 2010:393]と考察される。しかし、これはある特定集団による活動でしかなく、それをもって社会的な特徴としてのイスラームに直結することはできない。そうではなく、地域社会や少数派社会といった、目に見えるもの以外をも含む社会の概念とともに、個人の信仰、個人を超えた社会的次元の宗教的現象について、それぞれの概念のイスラームの場合における重層性と複雑性から検討すべき点について、[Akutsu2013:120-122] で論じた。
- (38) トルコ国内の世俗主義や親イスラーム的政権の誕生、さらにはトルコを取り巻く政治・経済など国際関係の紆余曲折（たとえば「今井 2012:18」を参照）を経

て、ヒズメットが現在の形を取るようになったことは否定しない。しかしそれに至るまでの発展の過程については、[Yazuv2003: 31-47] が示すように、さらには、「具体的ムスリムの個人と集団の思想と行為の理解という（……中略……）〈イスラーム文明〉というグローバルな大枠の設定（……中略……）研究者の側にこのような視座が設定されることによって、具体的な研究の対象となっている特定の空間と時間におけるムスリム個人と集団の思想と行為の意味（……中略……）〈イスラーム文明の多様性と統一性〉」がよりよく理解できる [中村 1987:133-134]、といった比較上の視点をもって、別な専論が必要とされる。

参考文献

- 青木武信 2006 「イスラームと環境運動」 池田寛二編『地球規模の問題の現場検証：インドネシアに見る社会と環境のダイナミズム』八千代出版、pp.157-171。
- 阿久津正幸 2011 「揺るぎない知識の社会的構成：イスラームの知識とムスリム知識人の社会学的考察」 小林春夫他編『イスラームにおける知の構造と変容：思想史・科学史・社会史の視点から』早稲田大学イスラーム地域研究機構、pp.187-204。
- 板垣雄三 1992 「比較の中のアーバニズム：都市性のメッセージとしてのイスラム」『歴史の現在と地域学—現代中東への視角』岩波書店、pp.409-421。
- 2004 「人類が知識共同体となる未来：新しい社会＝文化システムを目指して」 中部大学国際人間学研究所編『アリーナ 2004 武者小路公秀の仕事』中部大学国際人間学研究所、pp.24-34。
- 2011 「中東の新・市民革命を、いま日本から見、そして考える」『世界』818、pp.199-210。
- 2012 「人類が見た夜明けの虹：地域からの世界史・再論」『歴史評論』741、pp.5-21。
- 井筒俊彦 1991 『イスラーム思想史』中央公論社。
- 今井宏平 2012 「〈ダーヴトオール・ドクトリン〉の理論と実践：シリアとの関係を事例として」『海外事情』平成 24 年 9 月号、pp.16-31。
- 大塚和夫他編 2002 『岩波イスラーム辞典』岩波書店。
- 小田淑子 2011 「世俗主義について」 粕谷元編『トルコ共和国とラーイクリキ』上智大学イスラーム地域研究機構、pp.67-77。
- 木場公男 1994 『イスラーム科学の残影』日本図書刊行会。
- ギュレン、F. 2007a 「真のイスラームにおいてテロというものは存在しない」 エルギュン・チャパン監修『イスラームの観点から：テロと自爆攻撃』小村桜訳、The Light、pp.13-23。
- 2007b 「イスラームとテロを同一視してはいけない」 エルギュン・チャパン監修『イスラームの観点から：テロと自爆攻撃』小村桜訳、The Light、pp.24-7。

- 幸加木文 2011 「現代トルコにおけるラーイクリキ概念の再解釈の試み：フェトウッラー・ギュレンの言説を一例に」 粕谷元編『トルコ共和国とラーイクリキ』上智大学イスラーム地域研究機構、pp.56-66。
- 小杉泰 2006 『現代イスラーム世界論』名古屋大学出版会。
『コーラン』井筒俊彦訳、中央公論社、1992年。
- 作田啓一 2001 『価値の社会学』岩波書店。
- 佐々木力 1995 『科学革命の歴史構造』上下、講談社。
- 澤江史子 2005 『現代トルコの民主政治とイスラーム』ナカニシヤ出版。
- 自治体国際化協会 2005 『シンガポールの政策 (2005年改訂版)』自治体国際化協会。
- 自治体国際化協会 2011 『オーストラリアの多文化主義政策 Clair Report No. 358』(財)自治体国際化協会シドニー事務所。
- ジンメル、G. 1979 『社会学の根本問題：個人と社会』清水幾太郎訳、岩波書店。
- テイラー、C. 2011 『近代：想像された社会の系譜』上野成利訳、岩波書店。
- デネット、D.C. 2010 『解明される宗教：進化論的アプローチ』青土社。
- デュルケム E. 1975 『宗教生活の原初形態』上下、岩波書店。
——— 1985 『自殺論』宮島喬訳、中央公論社。
- 土井文博 2003 「G.ジンメルの形式社会学と E.ゴフマンの社会学：儀礼行為分析のための方法論的模索」『社会関係研究』9-2：165-188。
- 内藤正典 2012 「中東の政治変動とトルコ」『海外事情』平成24年9月号、pp.2-15。
- 中村光男 1987 「文明の人類学再考」伊藤亜人他編『現代の社会人類学：国家と文明への過程』東京大学出版会、pp.109-137。
- 羽田正 2005 『イスラーム世界の創造』東京大学出版会。
- ベラー、R.N. 1974 『宗教と社会科学の間』葛西実、小林正桂訳、未来社。
- 村上陽一郎編 1980 『知の革命史：1.科学史の哲学』朝倉書店。
- ロック、J. 2010 『完訳 統治二論』加藤節訳、岩波書店。
- Akutsu, M. 2010 “Social Revitalization through Promotion of Education: Socio-Historical Analysis of Islamic Education and Muslim Society in Pre-Modern Islamic World,” paper presented at *The Significance of Education for the Future: The Gülen Model of Education*, 19-21 October 2010, UIN/ Syarif Hidayatullah State Islamic University, Jakarta, Indonesia, pp.16-26.
- 2013 “Faith in Personal and Religion in Public: Muslim Society in Action in This World (*dunyā*),” *Orient* 48, pp.113-124.
- Balci, B. 2003 “Fethullah Gülen’s Missionary Schools in Central Asia and their Role in the Spreading of Turkism and Islam”, *Religion, State and Society* 31-2: pp.151-177.
- CBS 2012 “U.S. Charter Schools Tied to Powerful Turkish Imam,” May 13.
- Ebaugh, H. R. 2009 *The Gülen Movement: A Sociological Analysis of a Civic Movement*

- Rooted in Moderate Islam*, New York et al.: Springer.
- Gülen, F. 2000 *Prophet Muhammad: Aspects of his Life*, vol.2, Ali Ünal Trans. Virginia: Fountain.
- 2004 *Toward a Global Civilization of Love and Tolerance*, New Jersey: The Light.
- 2006a *The Essentials of the Islamic Faith*, Ali Ünal Trans. New Jersey: The Light.
- 2006b *Aḍwā' al-qur'āniya fī samā' al-wijdān*, Ūrkhān Muḥammad 'Alī trans. al-Qāhira: Dār al-nīl.
- GYV n.d. (Journalists and Writers Foundation), *Understanding Fethullah Gülen*, Istanbul.
- Kirişçi, K. 2008. "Migration and Turkey: the Dynamics of State, Society and Politics," R. Kasaba ed. *Cambridge History of Turkey, vol.4 Turkey in the Modern World*, Cambridge University Press, pp. 175-198.
- Prospect* "Meet the World's Top Public Intellectual: Fethullah Gülen," (rpr. of "The Top 100 Public Intellectuals", and "The Plight of the Public Intellectual", *Foreign Policy* 166, May/June 2008), Izmir: Çağlayan A.S., n.d.
- Raush, M. 2009 "Gender and Leadership in the Gülen Movement: Women Followers' Contributions to East-West Encounters," paper presented at *East and West Encounters: The Gülen Movement*, Conference December 5-6, 2009, University of Southern California, Los Angeles. CA., pp.175-193.
- Saritoprak, Z. 2003 "Fethullah Gülen: A Sufi in His Own Way," Yavuz, M. Hakan & Esposito, John L. eds. *Turkish Islam and the Secular State: The Gülen Movement*, Syracuse, N.Y.: Syracuse University Press, pp.156-169.
- White J. B. 2008 "Islam and Politics in Contemporary Turkey," R. Kasaba ed. *Cambridge History of Turkey, vol.4 Turkey in the Modern World*, Cambridge University Press, pp.175-198.
- Yavuz, M. H. 2003 "The Gülen Movement, The Turkish Puritans," Yavuz, M. Hakan & Esposito, John L. eds. *Turkish Islam and the Secular State: The Gülen Movement*, Syracuse, N.Y.: Syracuse University Press, pp.19-47.